

認知症高齢者の地域社会参加を可能にするために — 社会参加を促進するツールとして回想法を用いた取り組みについて —

現代福祉学部現代福祉学科4年
池 大介

《論文要旨》

現在認知症の改善や介護予防に繋がるとして「回想法」というものが注目されている。回想法とは、懐かしい写真や生活用具などを用いてかつて自分自身が体験したことを語り合ったり、過去のことに思いを巡らすことにより脳を活性化させ、生き生きとした自分を取り戻そうとする心理的アプローチである。

この回想法は、病院や高齢者施設などにおいて主に行われ、介護予防や、治療を目的とした活動として定着してきたが、高齢者に対するコミュニケーションケアが進展していく中で、地域コミュニケーションツールとして回想法を取り入れていく取り組みが行なわれ始め、徐々に広がりつつある。

しかし、こうした地域における取り組みは、期間が限定されて行われるものが多く、症状が改善していた認知症高齢者も、その期間が過ぎてしまうと症状が回想法を行う以前へと戻ってしまうという問題が残っているのが現状である。

こうした状況にあって、近年回想法を使った地域における取り組みが着目されている。回想法を単なるコミュニケーションツールを超えて、認知症高齢者の地域社会参加を可能にするツールとして取り入れた活動を行なっているのが、NPO法人「龍ヶ崎市回想法センター」である。

本論では、回想法の先行研究をはじめとして、「龍ヶ崎市回想法センター」のスタッフからの話を踏まえ、認知症高齢者の地域社会参加を可能にするためにはどのような課題があるのかを検証し、今後の回想法のあり方と、新たな可能性を明らかにする。

第一章では回想法がどのような歴史をたどり、どのような効果をもたらしてきたのかを記し、今徐々に広がりつつある地域回想法の取り組みの有効性と、その問題点を明らかにした。第二章ではNPO法人「龍ヶ崎市回想法センター」の概要と、「昔語りの会」への参与観察、及び当法人の活動に関与している方々へのヒアリングの結果を述べた。おわりにでは、文献とヒアリングの結果をもとに、回想法を高齢者の介護予防や治療としてだけでなく、高齢者が主体的に地域社会生活の中で世代間交流を継続的に図る、社会参加促進ツールとして取り入れていくことの可能性を述べた。



目次

目次

はじめに

第一章 回想法の現状

第一節 回想法の歴史

第二節 対象者の周囲に与える効果

第三節 地域における回想法の実践

第一項 北名古屋市における取り組み

第二項 その他の地域における取り組み

第三項 コミュニティケアにおける課題

第二章 NPO法人「龍ヶ崎市回想法センター」に対する調査

第一節 NPO法人「龍ヶ崎市回想法センター」の概要

第二節 「昔語りの会」への参与観察

I 目的

II 方法

III 結果

IV 考察

第三節 龍ヶ崎市回想法センタースタッフ、及び関係者に対するインタビュー調査

I 目的

II 方法

III 結果

IV 考察

おわりに

文献

はじめに

茨城県の龍ヶ崎市にある歴史民俗資料館には炭アイロン、足踏みミシン、ゼンマイ時計など、多くの昭和初期から30年代にかけての民具が展示されている。資料館の近くには瓦屋根の木造住居が建てられていて、そこにも脱穀機や珪瑯看板等の昔懐かしい民具などが展示されている。毎月第4土曜日、この場所でNPO法人「龍ヶ崎市回想法センター」により、「昔の遊び体験教室」が開催されている。ボランティアスタッフとして働いている高齢の方たちが、昔懐かしい民具などを詳しく説明してくれたり、昔の遊びを教えてくれたりするのですが、このスタッフの方々は認知症を

有している高齢者なのである。

そもそも回想法とは、懐かしい写真や生活用具などを用いて、かつて自分自身が体験したことを語り合ったり、過去のことに思いを巡らすことにより脳を活性化させ、生き生きとした自分を取り戻そうとする心理的アプローチである（梅本ら2007）。

この回想法は、病院や高齢者施設などにおいて主に行われ、介護予防や治療を目的とした活動として定着してきた。しかし、高齢者に対するコミュニティケアが進展していく中で、限定された場所での活動のみではなく、地域内におけるコミュニケーションツールとして回想法を位置づける新たな取り組みが生まれた。この取り組みは、資料館等の社会資源を活用し、専門職だけではなく、地域住民と共に昔の遊びや農作業などを通じて世代間交流を図ったり、生涯学習を行なっていく取り組みである。

このように、地域ケアの方法としても回想法が位置づけられてきたが、試行回数は、一般に毎週1回、1時間、計8回から12回（梅本ら2007）と有期のものがほとんどであり、症状が改善していた認知症高齢者も、その期間が過ぎてしまうと症状が回想法を行う以前へと戻ってしまうという問題が残っているのが現状である。回想法を行っている高齢者は、あくまでも援助を受ける側として回想法を行なっていることが主な原因としてあるのではないだろうか。受身としてではなく、認知症高齢者が回想法をひとつの社会参加のきっかけとして、主体的に地域内においてコミュニケーションをはかっていくことができるようにしていくことはできないのであろうか。

こうした問題の解決のために、回想法を認知症高齢者の地域社会参加を可能にするツールとして取り入れた活動を行なっているのが、NPO法人「龍ヶ崎市回想法センター」である。

本論では、回想法の先行研究をはじめとして、「龍ヶ崎市回想法センター」のスタッフからの話を踏まえ、認知症高齢者の地域社会参加を可能にするためにはどのような課題があるのかを検証し、今後の回想法のあり方と、新たな可能性を明らかにしていく。

第一章 回想法の現状

そもそも回想法とは、昔懐かしい写真や生活用具などを用いて、かつて自分自身が体験したことを語り合ったり、過去のことに思いをめぐらすことにより脳を活性化させ、いきいきとした自分を取り戻そうとする心理的アプローチとして定義づけられている。また、回想法を表す用語は大きく分けてライフレビュー・セラピーとレミニッセンス・セラピーの2つがある。ライフレビュー・セラピーは、発達段階に沿って現在・未来といったライフヒストリーを系統的に聞き、その意味を探求することを通じ、自我の統合を目指そうとする治療的側面が強い狭義の概念として定義付けられている。一方レミニッセンス・セラピーは一般回想法と呼ばれ、意識的な自我の統合を目指すだけでなく、喜び楽しみの提供、適切な刺激の提供、仲間づくりや世代間交流の場、生涯学習の場など、レクリエーションの要素を持ち合わせたより広義な概念として定義付けられている（梅本ら2007、遠藤2007）。

それでは実際どのようにしてこれらは広まっていったのであろうか。本章では資料をもとに回想法の取り組みの現状を明らかにしていく。

第一節 回想法の歴史

回想法は1960年代になってバトラーが、それまでは否定的に捕らえられてきた高齢者の回想の傾向を、過去の未解決の課題の再把握をも促す積極的な意味を持つものであると提唱したことに始まる（野村1993）。

認知症を有する高齢者に関しては、1987年、バインズらが老人ホームに入所する認知症高齢者15人を対象に、リアリティ・オリエンテーション（時間や場所が分からない見当識障害を解消するための訓練〔田中2003〕）を取り入れた回想法を実践し、行動の改善が認められたと報告した（津田2008）。

また同年にゴールドワッサーは、認知症高齢者の中でも言語的コミュニケーションが可能な27人に対して実践し、認知的側面、行動的側面に有意な差は見られなかったが、情動的側面に改善が認められたと述べている。しかし、フォローアップ時には効果が消えていたので、認知症高齢者に対する回想法は、継続的に思考される必要があることを示唆している（吉岡2000）。

モートンらは1991年に認知症高齢者への心理・社会的療法としてRO（リアリティ・オリエンテーション）、ヴァリデーショナル療法と回想法との比較検討を行った。結果、効果は対象の個別差によるものが大きいので、対象者別に評価することが重要であると指摘している。また、認知症高齢者への諸グループ療法は、参加者のケアの個別化に組み入れてこそ意味があることを示している（野村1998）。

ウッズらは1992年に中等度の認知症高齢者の回想法グループについて、その効果を比較している。この調査は、情動面や知的機能の変化は評価の対象ではなく、グループ経過に伴う会話数の頻度と方向に焦点があり、回想法の効果研究の中では新しい試みであった。結果として、回想法グループの効果について施設やそのグループが行われる環境の相違を視野に入れる必要性を指摘している（野村1998）。

上述の諸研究が軽度から中度の認知症高齢者を対象としたものであったのに対し、マッカーナンらは1991年に、重度の認知症高齢者へのグループ回想法を異なった3種の間で行い、比較検討を試みた。結果、知的機能に重度の障害があっても、入り組んだ言語的活動中心のグループの中において、他者への関心が増し、社会的交流が可能であることを示している（野村1998）。

日本においては、1992年、野村が特別養護老人ホームの入所者に回想法を実践した研究報告から、回想法研究がスタートしている。認知症高齢者を含まない特別養護老人ホーム入所中の8名の高齢者を対象に、参加者全員が支持的な相互交流を行なったこと、施設入居に対する否定的回想から肯定的回想へと変化が認められたことを報告したのが、回想法研究の始まりである（津田2008, 野村1992）。

翌年には、特別養護老人ホームに入所中の認知症高齢者8名に実践し、その効果として、フロアで見られるより活発に他メンバーやスタッフと交流し、表情が豊かになったことや、比較的軽度の認知症高齢者の方がより肯定的な変化が大きかったことを報告している。また、認知症高齢者へのアプローチの結果については、職員、家族への効果を同時に考察することの必要性を記している（津田2008, 野村1993）。

黒川は1994年、老人病院に入院中の認知症高齢者8人を対象に回想法グループを施行し、グループ前後の変化を見ている。その結果、回想法グループが認知症高齢者のQOLの向上にとって意味

のある方法であることが示唆された。また、1997年には認知症疾患の回想法を行い、事例からその有効性と限界を明らかにしている。その中で、回想法は認知症疾患の治癒が目的ではなく、「QOLの向上」への援助が望まれることを指摘している（吉岡2000）。

工藤らは2003年、病院に入院している軽度から中度の認知症高齢者3名に回想法を行ったところ、介護度が低いほど、あるいは認知症の重症度が低いほど回想による影響が大きくなるとは限らない、つまり、介護度や認知症の程度によって回想法の効果は限定されないと指摘している。また、効果は認知機能、精神状態などにおいて断片的に検討するのではなく、それらを統合して多面的に捉える必要があると指摘している（工藤ら2003）。

このように回想法は認知症自体の完全な治癒にまでは至らないものの、重度、軽度に関わらず、認知症高齢者に対して肯定的結果をもたらしている。

第二節 対象者の周囲に与える効果

回想法は対象者である高齢者に対しての効果のみが取り上げられることが多いが、その高齢者の周囲のものに与える効果も実に大きい。野村が「回想法グループの対象者への効果は、職員・家族・環境への効果が共に検討される必要がある。回想法が誰のための効果かと問うときに、痴呆性高齢者のケアの質が高齢者自身の問題への解決だけでなく、周囲の関与する職員や家族の変化が原因となっていることを前提とすると、回想法もその効果を職員・家族への広がりを持って見直さなければならぬ」（野村2004b:29）と語るように、高齢者の回復と、周囲の変化は切り離して考えることができないものである。

家族に与える影響において、2002年、新田らは訪問看護の利用者とその妻に回想法を行った結果、お互いに怒りをぶつけ合う不安定な関係性が修復され、回想法による援助は、患者（利用者）及び介護者（家族）を含め実施することで、患者・介護者の関係も円滑となり各々がよい方向に転じる手段となることを記している（新田2002）。

また、工藤らによると、回想法実施中に別室で待機していた家族は、雑談をすることで絆が深まり、「家族の会」と称したお互いの悩みを打ち明け、相談しあう回想法グループとは別のネットワークが形成されたという。連絡先を交換したり、診察日を合わせたり、次に集まる日程を調整したりと、楽しく意義のある会になっているという。高齢者が回想法の参加を終了した後も「家族の会」は独自に継続され、家族同士の交流が広がっていった事例である。また、ほとんどの参加者がデイサービスのよう外へ出かける機会を活用するようになり、日常生活への適応力の回復が見出されたという。これは回想法による高齢者自身の意欲の向上や情緒の安定などに加え、「家族の会」によって家族が介護に関する知識を高め、意欲的になったことがひとつの要因として挙げられる（工藤ら2007）。

職員に対する影響において、野村によれば、回想法の実践にあたり、6名の職員が補助者の役割を取っているのであるが、この職員の感想のまとめでは、

- ① 今まで考えていた認知症高齢者のイメージと非常に異なっている。
- ② いろいろな話を聞いているうちに、尊敬の念を持って接していかなければならない。
- ③ 認知症高齢者との信頼関係を築いていきたい。

といったものがあり、施設職員に対する効果がとても高かったことが示されている（野村2004a）。

佐藤らによると、療養型病院と介護老人保健施設に入院・入所中の認知症高齢者を対象に回想法を行なった結果、家族にとっては高齢者と共に生きた人生や関係性を振り返り、繋がりを見出す意味を、現場のスタッフにとっては、病棟では見ることのできない認知症高齢者の表情や発言に能力を再発見し、ケアスタッフがその人を理解する手がかりを見出す意味を記している（佐藤ら2005）。

このように、回想法を行うことにより、人と人との繋がりが形成されたり、高齢者の新たな一面を見ることで、認知症高齢者への理解が高まったり、援助の質の向上が図られるなど周囲のものに対してもプラスの影響をもたらしている。また、このことが更なる高齢者のQOL向上に繋がっていることが伺える。回想法による交流は、高齢者とその周囲のものとの相互的な理解や援助を促進していく大きな力となっているといえる。

第三節 地域における回想法の実践

現在までに至る回想法は一節に記したように、ライフレビュー・セラピーとしての要素が強く、病院や高齢者施設などの限定された場所において行なわれてきた。しかし、地域におけるケアの広がりと共に、レミニッセンス・セラピーの概念が重要視されるようになり、回想法による地域での高齢者支援も徐々に行なわれ始めている。

第一項 北名古屋市における取り組み

愛知県北名古屋市における回想法事業は、これまで病院、高齢者施設等、一部の特別な訓練を受けたものが実施していた回想法を一般化、標準化しようとする活動が国立長寿医療センター包括診療部長の遠藤英俊医師を中心に起こされ（市橋2004）、明治期の旧家「旧加藤家」の寄贈と、「歴史民俗資料館」の昭和の収蔵品が10万点を越えたことをきっかけに、2002年に開始された。「介護予防」や、老人医療費の削減を狙いとし、回想法の効果検証や高齢者の社会参加の基盤づくりを行なっている（加藤2008）。

主な回想法事業の1つに「回想法スクール」がある。2002年度は65-85歳の高齢者を対象に、介護が必要な人(8人)、虚弱または外出の機会が減っている人(9人)、健常者(9人)の3グループに分かれ、各グループ週1回、8回1クルールのスクールを実施した。博物館が所有する昔の教科書、すり鉢、洗濯板などの道具を使い、回想法を行なっている。その効果は大きく、最初は誰とも話さなかった人が談笑し、化粧をするようになった参加者もいたということである。また、効果測定でも認知機能やQOL、抑うつ傾向の改善、閉じこもりの軽減、介護者の介護負担の軽減が確認され、参加者による自主グループもできたということである。また、2003年度には、回想法センターに集まることができない人にも経験してもらおうと、地域の施設に出向き、介護を必要としていない高齢者4グループを対象に回想法スクールを行なっている（精神科看護編集部2004）。

回想法を行なう際、高齢者の記憶を呼び覚ます実物資料が重要な役割を果たすのであるが、実際には施設・病院等では簡便に準備できる状況にはない（遠藤2007）。そこで、2003年10月からは、歴史民俗資料館が収蔵する資料と、回想法ビデオ、解説書などをユニットにし、梱包した「回想法キット」を作成し貸し出しに供することで、高齢者関連施設、自治体などにおいて簡便に回想法を実践できるようにした。「回想法キット」は、「スターターキット」と「テーマ別キット」から構成されている。「スターターキット」は、多くの高齢者が共通して過去に経験しているであろう資料を収め、

認知症高齢者の地域社会参加を可能にするために

実物資料に付属して回想法及び回想キットの使い方についてのレクチャーを収録した回想法スターターキット用のビデオを添付している。また、本町の事業を収録したビデオも同梱することで、回想法についての基本的な事柄を伝えることも目的としている。「テーマ別キット」には、小学校、洗濯、裁縫、夏、冬などテーマに準拠した資料を収め、かつ、テーマに準じたビデオを添付している。福祉関係者、高齢者施設、博物館等から高い関心を集めている（市橋2004）。

第二項 その他の地域における取り組み

江戸東京博物館では高齢社会における博物館の新たな取り組みとして、平成16年度より、東京都老人総合研究所、トータルメディア開発研究所、文化総合研究所と共に博物館資源を活用して高齢者の健康増進を目指す共同研究事業「高齢者げんきプロジェクト」を進めている（遠藤2007）。博物館における従来の「体験コーナー」は観覧者が直接「もの」に触れて、自由に作動することができるだけであったが、もっと臨場感を作りそこに入ると、昔の東京を「体感」できるような仕組みにしようと、昭和初期に実際に建てられた常盤台住宅を建築モデルに、住宅1棟を立てることにした。観覧者は靴を脱いで家にあがって畳に座り、今は失われてしまった日用品の数々を手にとってもらおうと、身を持って往時の生活空間に分け入ることができるような設置となっている。また、高齢者とのコミュニケーションをはかるため、専門スタッフ（エデュケーター）を配置している（小林2004）。平成17年8月から平成18年1月にかけては、この場を利用して、「地図づくりプログラム」が行なわれた。これは資料をよく知る学芸委員等スタッフがリーダー、コ・リーダー（リーダーは話の引き出し役、コ・リーダーはサポート役である〔梅本ら2007〕）としてグループに入り進行役と聞き役を務め、

- ① 高齢者に昔の暮らしについて話をしてもらう。
 - ② 聞き取った内容を地図に載せ、「記憶の地図」を作り展示・発表する。
 - ③ 参加者はプログラム期間中、万歩計を装着し、歩数と日常生活に関する記録を付ける。
- という取り組みである（遠藤2007）。

島根県の斐川町図書館では、図書館の資料、本や古い写真、新聞などを活用して回想法の場や資料の提供をしている。暖炉の部屋を設け、高齢者の世代間交流の場としている。視力が落ちて読める「大活字図書」や、昔を懐かしく思い出せる「写真」「歴史書」、直接手に触れることができるものとして洗濯板や湯たんぽなどの「民俗資料」を置いている。回想法の取り組みとして2004年から月に2回「思い出語りの会」を行なっている。当初暖炉の部屋で行なっていたが、図書館まで出かけることができない高齢者のために、福祉施設6箇所に出かけ、1時間程度の集いを行なっている（遠藤2007）。

滋賀県高島市では絵屏風による回想法を、高島市のデイサービスセンターで2007年に2週に1度、計3ヵ月間、81-97歳の女性6人に実施している。この屏風に描かれた絵は、地元住民や学生が高齢者に聞き取りを繰り返し、集まった話を絵にしたもので、昭和10年代から第2次世界大戦をはさみ、現在までの地域の様子が描かれている。鬱と判断された女性が回想法導入後挨拶をしたり、他人への気遣いを見せるようになるなどの有効性が見られたという（産経新聞2008.10.08東京朝刊／生活・文化面）。

笑いを通じて介護予防をと、埼玉県坂戸市の地域包括支援センター若葉のケアマネージャーが結

認知症高齢者の地域社会参加を可能にするために

成した劇団「松竹梅」は、戦後・戦前の松竹映画をコント仕立てにアレンジした「お笑い思い出劇場」を地域の老人会などに出前公演している。「愛染かつら」、「君の名は」、「喜びも悲しみも幾歳月」をモチーフに名場面を取り上げ、出演者を高齢者に置き換えるなど高齢者の興味を引く工夫をしている。昭和30年代のクイズに答えてもらったり、歌ったりと、高齢者も参加する内容になっている（朝日新聞2009.04.08朝刊／埼玉全県・2地方26頁）。

第三項 コミュニティケアにおける課題

上記のように、地域内においても回想法が徐々に取り入れられるようになっている。しかし、これらの事業はある一定の期間に行なわれるものが多く、また高齢者にとって受動的なものであり、あくまでサポートしていく相手として回想法が行なわれている場合が多い。これではその効果は一時的なもので終わってしまう可能性が高い。太田らによると、5週間回想法を中断した後、比較的問題行動が少なかった患者が、トイレに顔を突っ込んでしまう問題行動や、抑うつ的な症状を訴えるといったケースがあったという。認知症患者において回想法を中断することは患者の意欲の低下を招く危険性があると推察されている（太田2009）。

こういった問題に対処すべく、北名古屋市ではスクール終了と同時に「いきいき隊」隊員に任命し、同窓グループの交流が途絶えることなく、活動が続くようにした。各同窓グループは月に1、2回程度回想法センターに集まり、おしゃべりをしたり、回想から生じたものを再現（よもぎ餅作り、わら草履作りなど）したりする。また、地域の児童館や保育園に出向き、子供達に昔の遊びを教えたり、昔の暮らしを伝えるといった世代間交流も行なう（りんくる編集部2007）。毎週水曜日午後2時からの「お話しひろば」は、オープングループとして市内外問わず多くの人に幅広く利用されている。スタッフやボランティア合わせて23名が進行役になり、参加者が持参したものや季節のテーマに沿って回想が展開される。自由参加のためメンバーは毎週入れ替わるが、常に10-15名の方（いきいき隊は約半数）が参加をしており、見学者や実習生も快く歓迎している（加藤2008）。

この「いきいき隊」は回想法事業において副次的なものであるが、筆者はこの高齢者が主体的に回想法を地域とのコミュニケーションツールとして生活に組み込んでいくことが、地域社会参加を持続させるために最も重要な点ではないかと考える。

この観点を事業の主とし、回想法を受身として行なわれる治療法としてではなく、サポートされる側からサポートをする側の存在へとなれるよう使いながら、認知症高齢者をスタッフとして共に活動を行なっている団体がある。次章ではその団体、NPO法人「龍ヶ崎市回想法センター」による活動について、インタビュー調査、参与観察の結果を記していく。

第二章 NPO法人「龍ヶ崎市回想法センター」に対する調査

第一節 NPO法人「龍ヶ崎市回想法センター」の概要

「龍ヶ崎市回想法センター」設立のきっかけは、代表の赤嶺氏による母の介護体験がもととなっている。代表の赤嶺氏の母であるふくさんは足の骨を折り入院すると、数週間ほどで娘の名前を忘れるなどの認知症の症状を現し、要介護4の認定を受けた。そんな時、赤嶺氏は母が元気だったときに書き留めておいた「回想録」をもとに、傾聴活動を行なうようになった。また、歴史民俗資料館

へ行っただけには、展示品を見ながら昔のことを話した。こうした回想を続けるうちに、要介護度4から1までの回復を見せたのである。この体験をうまく介護に取り入れたら、在宅介護家族の介護負担を軽くすることができるのではないかと、また介護における問題や悩みを抱えているもの同士が集まって、知恵を出し合い、支えあっていくのが一番よいのではないかと考え、自分も含めた皆が、地域の中で一緒に見てもらえるようなネットワークを作る取り組みを始めたのである(赤嶺2007)。そして2005年に、回想療法を活用しながら認知症予防活動を行なうことを目的として、特定非営利活動法人「龍ヶ崎市回想法センター」が設立されたのである(赤嶺ら2006)。

現在ここで働いているスタッフはボランティアメンバーを含め16名ほどである¹。ボランティアメンバーの平均年齢は75歳で、最高齢では94歳の方がいる(龍ヶ崎市回想法センター 2009)。会費、ルールはなく(オールスクウェア編集部2009)活動に参加する際の予約などの必要もない¹)、誰でも参加できる開かれた活動となっている。

2006年から行なわれている「回想ガイド」の活動は、第1、第3の火曜日、金曜日に行なわれていて、龍ヶ崎市歴史民俗資料館に展示されている昭和の生活用品を見ながら、来館された高齢者の昔話を傾聴する活動である(朝日新聞2007.10.14)。この活動は博物館を使用するという点で行政との連携が必要であるが、ここで問題となるのが「縦割り行政」のシステムであった。それぞれの部署が厳格に担当範囲を持っているので、使用目的が文化の伝承や紹介である博物館では、介護予防活動には使用できないことになる。そこで、活動の主体が当法人であることを生かし、資料館で行う活動目的を「地域文化の伝承活動」とし、介護予防ということを「表の目的」に出さないで活動している(小林2006)。

また龍ヶ崎市の認知症予防事業(21年度)である「昔語りの会」が元気サロン松葉館(松葉小学校・空教室)で、毎月第2、第4木曜日に行なわれている。この活動は昔語り(グループ回想)のリーダーを育成する取り組みである。市内在住の高齢者の方々が集まり、回想法を行ない、赤嶺氏の助言を受けながらリーダーとしてのスキルを獲得していただく。そしてその方々が地元に戻り、高齢者の方々と共にリーダーとして地域社会参加をしていただけるようにしていく活動である²。

冒頭で紹介した「昔の遊び体験教室」は毎月第4土曜日に行なわれている。敷地内の田んぼで稲作をしたり、ロウセキで絵を描いたりして世代間交流が図られている。高齢者ボランティアスタッフもそれぞれの特技を生かしながら活動に参加し、それが張り合い、生きがいになっている(オールスクウェア編集部2009)。

第二節 「昔語りの会」への参与観察

I 目的

「昔語りの会」は回想法に参加している高齢者自身にリーダーとなってもらい、主体的に人との関係を構築していくスキルを獲得してもらうということで、今までにない新たな取り組みであるといえる。また、リーダーとしてのスキルを身に付けた高齢者は、各々の地域においてそのスキルを活用し、主体的に地域社会における活動にリーダーとして参加していくことになる。この取り組みは、高齢者の地域社会参加を可能にする基盤づくりに貢献する活動の一つとなりえるであろう。そ

¹ スタッフの人数等の情報は「龍ヶ崎市回想法センター」の代表である赤嶺氏へのインタビューの際に得たものである。

² 「昔語りの会」の概要は「龍ヶ崎市回想法センター」のスタッフである平本氏から参与観察の際に得た情報である。

ここで、実際にその取り組みがどのように行なわれているのかを知り、その可能性について考察を行なうために参与観察を行なった。

II 方法

今回の「昔語りの会」は8月27日の13:30から14:30までの60分間、松葉小学校の空教室である「元気サロン松葉館」にて行なわれた。参加者は龍ヶ崎市内に住む高齢者14名である。オープングループ(日によりメンバーが自由に変わるもの。これに対して最初から最後まで同じメンバーで行なうものをクローズドグループという〔梅本ら2007〕)により、1グループ7人の2グループに分かれ、各グループリーダー役2名で行なわれた(以下グループ1、グループ2と記す)。椅子は円形に並べられ、グループ分けは特に決まった方法を用いず、参加者が好きな場所に座った。リーダーは参加高齢者の中で自ら決めた。テーマは「夏休みの思い出」であった。当回想法には特に昔のものなどを用いることはなかった。回想法終了後、14:30から15:00までの30分間で今後の回想法のテーマを決めた。筆者は回想法には参加せず、外からその模様を観察し、ノートに記録した後に文章としてまとめた。

参与観察は龍ヶ崎市回想法センター代表、龍ヶ崎市職員の許可を得て行なわれた。また、今回得た情報は当論文以外に使用しないこと、個人情報に配慮し、個人を特定できる情報は極力記号で表記するようにすることを伝えた。

III 結果

回想法が行なわれた場所は扉などがなく、小学校の生徒たちが行き来することができる開かれた空間であった。回想法の参加者には認知症の妻とその夫の夫婦で参加している方もいた。また、「龍ヶ崎市回想法センター」からは、ふくさんがグループ1、スタッフのA氏がグループ2に入り参加した。進行はリーダー役となった高齢者が行い、グループメンバーがみな会話に参加できるように、時折赤嶺氏から助言を受けながら話を振るという形で行われた。また、リーダーは参加者の話の内容を書きとどめていた。市職員の方々や赤嶺氏も回想法には参加せずに、外から回想法の状況を観察し、その模様を書きとどめていた。

グループ1においては宿題の話、海へ行って貝を取ったこと、ラジオ体操の話、蝉を取りに行った事などが話題に上がった。グループ1には認知症を抱えた方が参加しておられた(以下B氏と記す)。B氏はあまり積極的に会話に参加することがなく、口数は少なかったが、終始笑顔で人の話に耳を傾け相槌を打っていた。

グループ2においては、富士山に登ったこと、海へ行った事、缶けり、家の手伝いの話などが話題に上がった。2グループに参加していたふくさんは、耳が遠いので時に話を聞き取れないことがあったが、隣に座っていた参加者が自主的にふくさんの耳元で話の内容を伝える役を行なっていた。夏休みは「親の手伝いばかりで思い出がない」と語っていた方もいたが、「その分今を楽しんでいる」と発言をしていた。

戦争の話は両グループに共通してあがった話題であった。

今後のテーマ決めにおいては「運動会」「食事」「稲刈り・収穫」「昔の遊び」「正月」「憧れのスター」があがった。

IV 考察

今回の参与観察において、高齢者の主体的行動を垣間見ることができるシーンがいくつかあった。リーダー役の方は両グループにおいて、グループメンバーの話を引き出していこうと、つたないながらも楽しそうに役割をこなしていた。グループ1においては、B氏があまり話に参加できないのを見た同じグループの参加者が、皆B氏に話をふって話題に上げようとする心遣いを見せていた。B氏もまたそれをきっかけに言葉数が少ないながらも、笑顔で自身の話をしていった。また、自ら話をするシーンも増えた。グループ2においては、ふくさんの隣に座っていた参加者が自主的にふくさんの耳元で話の内容を伝える役を行っていた。これによりふくさんは会話にスムーズに参加することができるようになり、いきいきと積極的に話をするようになっていた。すべての方に共通していたのが、すべての方が話をするように配慮し、話をしているときはその方の話に耳を傾け、皆がお互いを尊重している様子であった。

このように、参加高齢者はそれぞれ相手にどのように接すれば、相手の話を引き出すことができるか自主的に考え、行動を起こしていた。これは自分が必要とされる役割を与えられること、または見つけられることが、高齢者の主体性を引き出しているからではないだろうか。また、その行動が相手の主体性を引き出し、互いが主体的に活動に取り組むことができる場を構築しているといえるだろう。主体的に地域社会に参加することができるスキルを体得していくというこの取り組みの狙いが、うまく結果へと繋がっているといえるのではないだろうか。

今後の目標は、当取り組みに参加した高齢者が、それぞれの地域において主体的に地域社会における活動に参加し、そのスキルを持ってリーダーとして参加者の主体性を引き出していくこととなる。まだ始まったばかりの活動ということもあり、リーダー役の方の進行にぎこちない面もあるなど小さな問題もあるが、この取り組みが成熟したものとなり、広く実現されていけば、高齢者が主体的に地域社会と関わっていくための基盤づくりに貢献していくことができる取り組みとなっていくのではないだろうか。

第三節 龍ヶ崎市回想法センタースタッフ、及び関係者に対するインタビュー調査

I 目的

「龍ヶ崎市回想法センター」の取り組みは、高齢者の主体性を尊重し、地域社会参加を可能にしていくことができるようにする取り組みをメインに行なっている。また認知症高齢者をスタッフとして、共に回想法を用い地域住民と主体的にかかわりを持つ試みを行なっている。そこで、NPO法人「龍ヶ崎市回想法センター」のスタッフ、及びその取り組みにかかわりを持つ方々へインタビューを行なうことにより、当取り組みにおける実情、効果等を明らかにすると共に、回想法の新たな可能性について検討した。

II 方法

1. 形式

質問の意図を詳しく伝え、質問対象者自身が考えるこの取り組みに対する意見や、その回答を効率的に得る手段としてインタビュー形式を用いた。調査はそれぞれ2009年6月から8月の間に4度実施し、質問に対し口頭で回答していただいた。インタビュー時間は約60-120分であった。回答は

認知症高齢者の地域社会参加を可能にするために

ほぼ逐語的にノートに記録し、同意を得た上でボイスレコーダーも併用し、後に文章としてまとめた。また、今回得た情報は当論文以外に使用しないこと、個人情報に配慮し、個人を特定できる情報は極力記号で表記するようにすることを伝えた。

2. 対象

① NPO法人「龍ヶ崎市回想法センター」のスタッフ

A氏（かつての利用者 現スタッフ）、C氏（代表）、D氏（かつての利用者 現スタッフ）、E氏（設立時からのスタッフ）、F氏（民生委員）

② 「龍ヶ崎市回想法センター」の取り組みに参加している方々

A氏の妻、B氏の夫（「昔語りの会」参加者）、G氏（回想法を学びにきている方）

Ⅲ 結果

A-Gの職員及び関係者に下記の質問をした(表1)。以下、枠内に記されているのは対象者の回答であり、()内のアルファベットは対象者のIDである。

表1 関係者に対する調査結果

質問	回答
なぜ認知症の方をスタッフとして受け入れていこうと考えたのか	認知症の方をそう（区別して）見ていない。今後高齢者が増えていき、認知症の方が増えていく中で、こういう人たちなしの生活は考えられない。私はよそ者。Aさんは地元の人で、その土地のプロ。Aさんなしでは活動が成り立たない。Aさんは営業で働いていた。私たちにはない能力がある。ここでは残った能力を生かすことができる。皆が家で暮らしていけることが目標。(C氏)
認知症の方がスタッフになるまでの経緯を教えてください	事例Ⅰ C氏の母 88歳のときに、大腿骨を骨折して入院すると2週間で私(C氏)が分からなくなり、初めて介護保険を申請して、要介護4の認知症になりました。怪我をしたことや手術をしたことを忘れてしまった母は、泣き喚いては荷物をまとめて東京へ帰ろうとしていました。そんな時に、資料館に展示されていた足踏みミシンを見て、「これであなたのたびを縫ったことを覚えているよ」と、私に話し始めました。それから、回想録を見ながら母と昔話を始めるようになりました。家族は、母のできることはなんでもやらせて、やってくれたことには「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えるようにしました。この家では母がいなくて困るということを体感できるようにして、母がこの家では必要というサインを送り続けました。忙しい家族の時間で動かすのではなく、母の時間で動けるようにしました。これが功を奏したのか、龍ヶ崎に来て6年、いまだに要介護2をキープし介護サービスを受けずに済んでいます。そして母はNPO法人を立ち上げた時からの最長老ガイドとして活躍しています。(C氏)
	事例Ⅱ A氏 A氏の父親が、徘徊を繰り返し警察沙汰になるなど、舅の介護で大変な思いをされたA氏の奥様が、外に出たがらず、テレビばかり見ているA氏の異変に気づき「物忘れ外来」を受診すると、認知症と診断されました。奥様がこのままでは舅のようになってしまうと心配しているときに、資料館で認知症予防のための回想ガイドを知り、A氏を車に乗せて資料館へとやってきました。A氏は何度も同じ話を繰り返していましたが、その都度初めて聞いたように感動し、しっかりと聞いてあげました。すると、すぐに1人で資料館に来るようになり、回想ガイドを支えてくれるサポーターとして活躍するようになりました。回想ガイドを手伝うようになって2年、今では回想法の講座の助手として活動の手伝いをしてもらっています。(C氏)

認知症高齢者の地域社会参加を可能にするために

質問	回答
認知症の方がスタッフになるまでの経緯を教えてください	<p>事例Ⅲ D氏</p> <p>家庭のことは奥様に任せて、会社を興し、仕事一筋で家族のために一生懸命仕事をしていました。しかし、D氏が体調を崩してから奥様との立場が逆転してしまって、奥様の方が強くなった。家にいづらくなって家の周りをふらふらと歩き回るようになった。資料館の前を通りかかったとき、声をかけたのが出会いでした。表情が暗くて、耳が遠いこともあって、こちらの問いかけにもうなづく程度でした。その日は資料館での活動予定表を渡して別れました。そのうち、活動日に合わせて来るようになって、いつしかスタッフと会話ができるようになりました。龍ヶ崎で生まれ育ったD氏は、資料館の企画展では主人公です。耳が遠いこともあり、人の輪の中でのお話は苦手なようですが、資料館にお世話になっているからと、資料館の草刈をしてくれたり、子供たちの見守りをしてくれるなど、裏方を一手に引き受けてくれています。資料館に居場所を見つけ、D氏なりにできることを見つけては、一人黙々と作業をしてくれています。仕事をしていたときはこんな表情をしていたのかと思えるほど、いきいきとした自信に満ちた実に良い表情を見せるようになりました。(C氏)</p>
回想法を始めてからどのような変化があったか	<p>回想法を始めてから3年間認知症の進行がないと医者も驚くほど。家にいる時はぼけていると思うこともあるけど、回想法に行くときはいきいきしている。涙を流して喜ぶほど。きっと周りの人(スタッフ)が盛り上げてくれているから。私は(A氏が)どこに行っているのか分かっているから安心。私は外に出かけ楽しむことができるようになった。家では互いの一日の話を楽しむようになった。(A氏の妻)</p> <p>妻はよくしゃべるようになった。今までは心配ではなれることができなかった。妻はこれ(昔語りの会)を楽しみにしている。回想法は一つの核(テーマ)があって、そこから枝分かれしてあんなことがあった、こんなことがあったと昔を思い出していくもの。ほかの人の話が忘れていたことを思い出させてくれることがある。その思い出していくことが大事だと思う。(B氏の夫)</p>
回想法が注目されるようになった背景は	<p>昔は認知症がここまでクローズアップされることはなかった。昔は今より仕事があった。仕事があると認知症の方もシャキッとす。今は仕事の多くが外部化されている。(C氏)</p> <p>生活が裕福になった分、親には「何もしなくていいですよ。ゆっくりしてください。」という感じになる。また、高齢者にとっては今の家電などは使いにくい。そうやって何もやることがなくなり、寂しい思いをする。そういう高齢者が増えている。(F氏)</p>
回想法を行なっていく上で重要なことは	<p>認知症高齢者を変えようとしてもダメ。まずは周りが変わらなければいけない。そのことによって相手も変わる。良い例がAさんの奥さん。あれこれやらせようとして今までは頭ごなしに言っていたのが、Aさんができることだけに注目するようになった。(C氏)</p> <p>年をとると若者に併せるということではできなくなる。だから若者の目線でみられることは苦痛となる。相手の目線に立つことが大切。本人が必要とされ、愛されているという実感をもてるようにしていくことが大切。(C氏)</p> <p>家族家族で暮らし方は違っていった。だからおばあちゃんならおばあちゃんの暮らし方がどんなものであったかヒントをつかんでいくことが重要。その人がしていた暮らしに近いものができたり、話ができると違ってくる。こちら側も話ができるようになってくる。(E氏)</p>

認知症高齢者の地域社会参加を可能にするために

質問	回答
現在の取り組みを行なっていく上で の問題点は	<p>回想法には地域文化がかかせない。しかし、行政は縦割りなので、うまくいかないことがある。たとえば本来、福祉活動は資料館でできない。資料館の管轄と回想法の管轄は異なっている。(C氏)</p> <p>行政は結果を数値化する。回想法は数値化するのが難しい。行政主導の場合、急に打ち切られる可能性もある。(C氏)</p> <p>バリアフリーに疑問。自分でできることが重要。何でもかんでもバリアフリーにすると、残存能力が衰えてしまう。(C氏)</p> <p>今、認知症の方が地域で暮らしていく基盤がない。今の医療は極端な話「邪魔なら施設に入れちゃおう」。入りたくないのに入った人は、会話をしない。(F氏)</p> <p>今の学生はコミュニケーション不足。知識はあってもそれを生かすためのコミュニケーション力がない。だから現場に出たときに話をするができない。(E氏)</p> <p>自分の住んでいるところでは同じ時代を生きた人が少ない。同じ時代を生きた人たちだと話がしやすい。こういった(回想法を行なう)場がもっと身近にあればいいと思う。(B氏の夫)</p>
どのように広報しているのか	<p>ホームページと資料館だけ。広報しても興味がなければ見ない。広報するよりも参加した方が施設などに帰って「こんなことがあった。今度一緒に行こう。」とか、そういった口こみの方が重要。(認知症の方)家に行くことはない。出てきてもらう。人の目を意識してもらうことも治療や予防の一環と考えている。(C氏)</p>
認知症の方と地域住民が交流することのメリットは	<p>回想法はコミュニケーションのきっかけを作るツールとなる。何も無い状態でいきなり会話をするのは難しい。(C氏)</p> <p>認知症の方と一般の方が一緒に遊んだりすることで、認知症の方には何ができるのか、何ができないのか、またどういったサポートをすればできるのがあるのかを知ることができる。たとえばペーゴマをまわすことができるが、うまく紐を巻くことができない人には、紐を巻いてあげることでこまをまわすことができる。巻くことをしなければその人はなにもできない人だと判断してしまう。(C氏)</p> <p>一般の人には固定概念があり、認知症の方に声をかけることが少ない(理解できないと思っている)。しかし、認知症の方も一般の方も同じように接することにより、コミュニケーションを取ることができることを知る。(C氏)</p> <p>子供に遊びを教えるとき、助けられる側から助ける側になることで、自尊心が生まれる。認知症高齢者の方と一緒に何かをすることで相手の視点に立つことができるようになる。ちょっとしたことでできることがすごいことなのだ知る。当人も褒められることで自尊心が高まる。その姿を見ることで、私自身も力をもらえる。(G氏)</p>
どういった方に来てほしいか	<p>誰でもいい。しいて言うならひきこもっている高齢者。ひきこもっている高齢者をどうやって外に出すかが大事。子供にも来てほしい。核家族化の影響などで高齢の方と話ができる子が少なくなった。けど今の子供は忙しい。土曜日などは塾に行く子が多いので、なかなかきてもらえないのが現状。(C氏)</p>
実際に来る方はどういった人たちか	<p>認知症高齢者を抱え、施設に預けることもできず、どうしたらよいかわからなくなった家族の方。(C氏)</p> <p>おじいさんおばあさんが学校に入る前の小さな孫を連れてくることが多い(第4土曜日)。(C氏)</p> <p>裕福な家庭で裕福な暮らしをしているおじいさん。家族内での会話がなく、話をしたいとやってきた。(C氏)</p> <p>今日で三日間話をしていないという人が来た。たまたまイベントを見つけ遊びに来た方で、見つけることがなかったらと思うと恐ろしい。これは認知症、孤独死の入り口。具合が悪くても伝達する相手がいらない。しゃべる相手がいらないから当人の状態がわからない。(E氏)</p>

認知症高齢者の地域社会参加を可能にするために

質問	回答
<p>回想法が周囲に与えた影響にはどういったものがあるか</p>	<p>(80数歳のおばあさん)家族が農家の方で、来る前はただデイサービスに行くだけだったけど、資料館に来て昔の農作業を観たら話をしだした。その後も私たちが知らない目から鱗の話を聞くことができた。それが周りの人の注目を引いた。それがうれしかったのか、家でこの話を家族にした。それを聞いた息子が鎌を持たせて農作業をさせると昔のように作業ができた。デイサービスに通わせるより経費がかからない。面倒を見る人から、家族の力となった。(C氏) (C氏の母)寝たきりだったら今頃こんなこと(NPO活動)はしてられない。皆と一緒にのところに連れてきて、座って話をするだけで母は楽しい。家でお世話になるだけでは申し訳ない、あそこに行けば娘の役に立つという気持ちが出てくる。当人がよくなれば、周りもよくなる。(C氏) 回想法をすると疲れるからよく夜眠るようになる。そうなるとう家族や施設スタッフは(介護等の面から)助かる。お互いに眠ることができるから朝起きたときにお互い気分よくいることができる。よく話をするようになる。食事が進むから、家族の人は早く片づけができる。その分自分の時間が増える。ちょっとしたずれが修正されていくことは大きな事。(E氏)</p>

IV 考察

「龍ヶ崎市回想法センター」のスタッフの方々のお話から分かることは、認知症高齢者を援助する相手としてではなく、共に生活を支えあっていくパートナーとしてみているということである。認知症を抱えた方に対して、今もっている能力を正当に評価し、当人に必要な役割を用意することができている。また、その試みがしっかりと当人に伝わっているからこそ、認知症高齢者スタッフは継続的に主体性を持って活動を行ない、自分の役割を見つけることができているのではないだろうか。

当法人の活動に関わっている認知症高齢者の身内の方々の話からも、当事者に対する認識を変え、当事者が自尊心を持って生活が出来る環境を作っていくことが主体性を引き出す鍵になると思われる。実際に高齢者の身内の方々の当事者に対する見方が、助けなければいけない存在から、共に生活を支えあうパートナーへと変わることによって、当事者は自尊心を回復していく姿を見せたり、認知症であっても残った能力を生かして多くの主体性を持った活動に取り組むようになっている。そしてそれがまたさらなる周囲の高齢者に対する認識の変化につながり、継続的な相乗効果が生まれているものと思われる。当法人における取り組みは、こういった環境を作り出す一つの方法を提供しているといえるだろう。

このように、認知症になったとしても、残った能力を生かすことができる環境があれば、当人は自分の役割を見つけ、しっかりとその能力を発揮し、主体的に社会に参加していくことができるのではないだろうか。いかにして高齢者の役割や居場所を作っていくかが重要な点となっていくと思われる。

こういった環境を作っていくうえでいくつかの問題もあるようだ。先ず今後の社会を担うことになる子供たちが、当法人の行なうような取り組みに参加することが難しい状況があるということである。認知症高齢者が地域社会において主体的に暮らしていくことができるか否かは、彼らが高齢者に対してどう関わっていくかにかかる部分が大きいの。彼らが高齢者と交流を持つことができるような社会環境を構築していくことが望まれる。また、縦割り行政の問題もある。今後の高齢者の地域社会参加を可能にする環境づくりにおいて、行政間における柔軟な対応も必要であろう。

おわりに

龍ヶ崎市回想法センター代表の赤嶺愛子氏は「認知症というものは現在になって急に増えたものではない。昔は認知症高齢者の方であっても家族の中ではしっかりと役割があり、当人もその役割をしっかりと理解し、生きがいとしていた。しかし現在、核家族化が進むのと同時に多くの家庭内の仕事が外部化されていく中で、認知症高齢者は家族内での繋がりが絶たれ、居場所を失いつつある」と言う。周りの人々は認知症高齢者との深い関わりがなくなっていくことで、彼らの残された、また隠れた能力を見ることがなくなり、既成概念にとらわれステレオタイプな対応になってしまっているのではないかとと思われる。また、認知症高齢者と何とか関わりを持ちたいと考えていても、どのようにコミュニケーションをとっていけばよいかかわからないということである。回想法には、そうした問題を打開する力があると感じる。「昔語りの会」に参与観察した際には、自分の話しに共感してもらえること、また相手の話に共感し昔を思い出すことがこれほどまでに人に活力を与えるのかと驚き、回想法の力を実際に感じた。また、今回のインタビューを行なう際に、回想法を行なっている認知症高齢者の方々と接する機会があったのであるが、初めて会った筆者に対しても終始笑顔で会話をし、いきいきとした表情であった。回想法を行なう前はほとんど会話をすることがなかったと聞く当事者がここまで回復したのは、自らが認めてもらえると感じることができ場がしっかりと確立されているからであろう。この環境が筆者の認知症のイメージを変え、認知症の方とスムーズにコミュニケーションをとるに至る要因であったと感じる。回想法は認知症高齢者とコミュニケーションをはかり、自らの社会参加を促進する優れたツールとなりうると感じる。

回想法は高齢者施設などある種限定された場所や、ある特定の期間における活動としては広がりつつある。しかし、それでは一般社会において地域住民が回想法に触れることはなく、回想法により見違えるほどいきいきとした認知症高齢者を見ることもない。また、回想法を終えていつもの生活に戻ったときに、自分の居場所や役割がなければ、結局よくなっていた状態も元に戻ってしまう。脱施設化の傾向が強まる現代において、やはりどのような家庭内、及び地域内においても居場所を確保していくことが必要であろう。それを可能にするツールの一つとして、回想法をより身近なものにしていくことが必要であると感じる。認知症高齢者に対する既成概念を変えていくためにも、回想法は認知症高齢者の介護予防として行なわれていくのと同時に、当人の周りの多くの方々が回想法を知り、認知症高齢者が主体的に活動できる環境をつくり、新たな一面(残された能力)に触れることが出来るようにしていくことが大切であると考えている。

龍ヶ崎市回想法センターにも活動日というものはある、しかし、そこで働くある認知症高齢者は、活動日に関係なく毎日のように資料館へと出かけ、訪れる人たちに対しガイド活動をしているという。これは赤嶺氏が認知症高齢者も健常者も関係なくお互いに助け、助けてもらう関係を構築できているためであろう。回想法がツールとなり、認知症高齢者が地域において主体的に自分の役割を見つけ出し、いきいきとした生活を送っているよい例といえるのではないだろうか。ほかにも回想法を取り入れた活動を行なう団体もある。しかし、認知症高齢者はあくまでサポートする相手であるという視点から行なわれているように感じる。「龍ヶ崎市回想法センター」の取り組みは、認知症高齢者のサポートという枠を超えて、共に生きるという概念に基づいている。こういった概念を

認知症高齢者の地域社会参加を可能にするために

持った活動と共に回想法が広く執り行われるようになり、人々に広く浸透していけば、認知症高齢者の地域社会生活が可能になっていくのではないだろうか。

そのために改善が必要な問題点も少なからずある。今後高齢化が進んでいく中、将来地域で高齢者を支えていくべき子供たちが、なかなか回想法に触れることができない現状があるようだ。知識があってもコミュニケーションが取れない学生も多くなっている。こういった状況を打開していくためにも、幼少期から高齢者と触れ合う機会を持つことができる環境作りが必要となっていくのではないだろうか。また、行政との連携をスムーズに取ることができる体制を構築していく必要があるだろう。

高齢者に対して回想法を行い、介護予防や治療を行なうのと共に、高齢者が回想法をコミュニケーションツールとして取り入れ、主体的に地域社会生活の中で世代間交流を継続的に図り、お互いに存在価値を高めあっていくことができるのが、回想法の理想的なあり方なのではないだろうか。

<文献>

赤嶺愛子ら(2006)回想法で楽しくやさしく-心療回想法の理論と実際(第21回)対談シリーズ(2)特定非営利活動法人龍ヶ崎市回想法センター代表 赤嶺愛子さん『ベストナース』17(6), (196) pp. 56-58

赤嶺愛子(2007)『認知症が治った-親の元気な姿をもう一度みたいあなたへのメッセージ』文芸社
市橋芳則(2004)師勝町「思い出ふれあい(回想法)事業」の展開 - 回想法を用いた博物館の高齢者支援プログラム(特集号 博物館における高齢者学習支援)『博物館研究』39(5),(432)pp.16-21

梅本充子ら(2007)地域在住高齢者に対する介護予防に資する回想法の有効性の研究『名古屋女子大学紀要』(53),pp.55-64

遠藤英俊/NPOシルバー総合研究所編(2007)『地域回想法ハンドブック-地域で実践する介護予防プログラム-』河出書房新社

オールスクウェア編集部(2009)龍ヶ崎市回想法センターを訪ねて-思い出話をしながらみんなで認知症を予防『らくらく読本』15,pp9-10

加藤則子(2008)地域回想法-介護予防の取り組み 回想法を介護予防、人と人をつなぐツールとして活用し、高齢者の豊かな経験と知恵を地域や学校教育に役立てたい(特集 認知症高齢者への回想法の実践)『GP net』55(2),pp.40-49

工藤夕貴ら(2003)痴呆性高齢者の個人回想法による効果『岩手県立大学社会福祉学部紀要』6(1),1-10

工藤夕貴ら(2007)「懐かしの間」を活用したグループ回想法の試み『老年社会科学』29(3),pp.403-411

小林幹児(2006)『回想療法の理論と実際』アテネ出版

小林淳一(2004)江戸東京博物館の「高齢者げんきプロジェクト」(特集号 博物館における高齢者学習支援)『博物館研究』39(5),(432)pp.13-15

佐藤弘美ら(2005)痴呆性高齢者のグループ回想法において家族とケアスタッフが捉えた意味-回想場面の映像から-『石川看護雑誌』2,pp.15-23

精神科看護編集部(2004)クローズアップ回想法で記憶の糸が紡がれていく-博物館と連携した地

認知症高齢者の地域社会参加を可能にするために

- 域での痴呆予防ケア愛知県師勝町の回想法事業『精神科看護』31(5)(140),pp.1-4
- 田中和代(2003)『誰でもできる回想法の実践－痴呆の人のQOL（クオリティ・オブ・ライフ）を高めるために』黎明書房
- 津田理恵子(2008) 回想法への期待：実践研究から考える文献展望『関西福祉科学大学紀要』11,pp.317-332
- 新田栄子ら(2002)回想法を用いて「居がい」感の向上を図る援助を分析－在宅における家族看護の重要性を検証『日本看護学会論文集, 地域看護』33,pp12-14
- 野村勝彦(2004a)痴呆性老人に対するグループ回想法の研究『福岡女学院大学大学院紀要：臨床心理学』増刊号,pp.37-41
- 野村豊子(1992)回想法グループの実際と展開-特別養護老人ホーム居住老人を対象として - 『社会老年学』(35)pp.32-46
- 野村豊子(1993)痴呆性老人への心理・社会的アプローチ－回想法およびリアリティ・オリエンテーションを中心として（痴呆へのアプローチ<特集>）『作業療法ジャーナル』27(9),pp685-693
- 野村豊子(1998)『回想法とライフレビュー：その理論と実際』中央法規出版
- 野村豊子(2004b)回想法の実践と臨床評価の課題(特集 痴呆の非薬物療法)『老年社会科学』26(1),pp.24-31
- 吉岡久美子(2000)高齢者の回想(法)に関する展望『九州大学心理学研究』1,pp.39-49
- 龍ヶ崎市回想法センター(2009)回想法センター便り8月22日発行
- りんくる編集部(2007) この町で生きる。(Vol.8)いきいき隊 認知症を超えて地域をつなぐ「地域回想法」の取り組み『りんくる』16,pp.30-32